

高橋秀樹著

『玉葉精読 元暦元年記』

(日本史研究叢刊 25)

和泉書院 二〇一三・八刊

A5 七一頁 一〇〇〇〇円

著者は『古記録入門』(東京堂出版)を上梓し、史料としては『新訂 吉記』本文編一〜三、索引・解題編(和泉書院)、『勘仲記』(史料纂集 共編)を世に出している。この古記録研究の俊英が、現時点での集大成のために選んだ方法が古記録の「精読」である。以下、内容紹介も交えながら本書の構成を示す。

本書は、元暦元年記を読むにあたっての「解説」から始まる。

「一、藤原兼実とその周辺」では、(1) 父母・兄弟姉、(2) 妻妾・子女、について解説される。著者は「解説」をあくまで「元暦元年記を読むにあたって」の必要な情報提供としているため、たとえば(1)は元暦元年までの情報にとどめているが、これらは『玉葉』はもちろんのこと、同時代の他の記録類を博搜し、関連研究の検討もふまえて著されたものであり、兼実研究の最新の成果といえる。「二、『玉葉』について」では、『玉葉』の書誌情報、具体的には諸写本の伝来、記事の特質、その変化などが紹介され、「三、九条家本『玉葉』について」では、本書が底本とした宮内庁書陵部所蔵九条家本『玉葉』そして元暦元年記について、詳細で行き届いた書誌情報が提供されている。「四、元暦元年の『玉葉』

と兼実」は、前年の情勢も含め、正月記から十二月記までの内容の概略をその背景とともにまとめたもので、元暦元年(一一八四)という源平争乱期のまったただ中、戦況も政情もめまぐるしく変化する一年を読むにあたり、非常に有益である。解説の末尾には兼実関係の略系図、邸宅の位置を示した京都図、『玉葉』関係文献目録が掲載されている。ついで「元暦元年記註釈」、巻末に元暦元年記人名索引、元暦元年記地名・寺社名・邸宅名索引、註釈語句索引、研究者名索引が付される。

本書の中核である「元暦元年記註釈」は、一日もしくは数日ずつの単位で、本文、書き下し、口語訳、註釈が示される。校訂が施された本文もさりながら、最も注目すべきはもちろん註釈である。著者は、輪読会などによる註釈がおのずと抱えざるをえない限界を超え、自らが求める註釈のあり方を追究するため、本書で註釈を施すにあたっては、どう解釈するのが可能で、どのように解釈したかという点に力点をおいたとする。したがって、註釈では、「なぜそのようなように読むか、なぜそのように解釈するのか」から説明がなされており、この〈読解の過程〉が示されているという点は、註釈書としての本書の最大の特徴であり、特長でもあるのではないかと思う。また、著者の研究蓄積をふまえ、厳密な考証をともなつて著された註釈においては、従来の多くの誤読が正され、新見解が示された箇所も少なくない。その意味で本書は膨大な研究の集積といえ、それも本書の大きな魅力であろう。「註釈」ではなく「精読」であることを、おそらく読者すべてが実感すると思われる。

評者の経験から、日本史専攻の課程においても、古記録の読解について微に入り細にわたり学べる環境が必ずしもあるわけではないということを感じている。半ば独学で古記録と格闘している学生・院生にとって、本書はよき「道場」（受け身で導かれるのではなく自らを鍛える場として）となるのではないだろうか。そしてわたしたち研究者にとっても、これまたなかなか得られない、議論を戦わせながら古記録を読み込む、という場を得たことになるのではないかと思う。

（伴瀬明美）